Faust Facta　（ファウストの現実）　ラプラスの魔との契約者

Prini

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｕｓｔ　Ｆａｃｔａ　（ファウストの現実）　ラプラスの魔との契約者

【Ｎコード】
Ｎ８６２７Ｔ

【作者名】
Ｐｒｉｎｉ

【あらすじ】
津波との戦いをテーマにした作品です。ゲーテのファウストをモチーフにしました。Ｆｒｉｇｉｄｕｓ　Ｓｙｍｍｅｔｒｉａの続編です。

Szene 1: Nacht（暗夜）（前書き）

契約しよう。ラプラスの魔よ。
魂と引き換えに”自然”を従える知識を

Szene 1: Nacht（暗夜）

全てに絶望したあの時、アクアはラプラスの魔と契約を交わした。魂と引き換えに、自然を統べる知識を手に入れたのだった。コルプスが死んでから、私は死んだも同然だったから、取られても構わなかった。

それからアクアは、科学を今までよりも必死に、そしてどこか憎みながら勉強し始めた。基礎ではなく応用を主にして。

そんな時、アクアの元に来客があった。特に断る理由も無いので、会うことにした。そこにいたのは、コルプスのようだった。もちろん錯覚だが、どことなく、似ていたのだ。

「始めまして。用件が長くなりそうなので、中で話してもいいでしょうか」

アクアは、少し訝りながらも家の中へと案内した。そして、空いていた椅子に座ると、話始めた。その椅子はコルプスが座らなくなってからホコリが溜まっていた。

「私の名前はアルボです。この前の災害の復興にあたっています」

「私が困っていると誰かから聞いて来たのでしょうか？　そうだとしたら、大丈夫です。特に困っている事はないので」

「むしろ、私達が困っているので、あなたに力を貸してほしいのです」

この提案はアクアの予想にはなかった。確かに、復興には人手がいるが、一々、個別訪問する手間はかけないはずだ。更に、アクアの体力は、平均より少し低いぐらいだ。

「何故、私に？　そもそも体力は、人並みもありませんが」

「違います。あなたの知恵を借りたいのです」
それは、予想外の返答だった。そして、理解できなかった。何故なら、アクアの知識は、とても科学に偏っていたからだ。
「具体的にどうしたいのですか？」
「具体的には決まっていません。ただ、誰か苦しんでいる人を助けるだけです」
その目にはただならぬ決意が宿っていた。だが、意志の力で世界を変える事などできはしない。もし、意志の力で変えられるなら、そこに座っているのはコルプスのはずだ。何度、そう願ったことか。本当に分かっているのか。アクアは少し苛立った。
「強靭な意志があれば、皆を助けることができると思っているのですか」
「全て救えるとは限らないことは知っています。けれども、何もせずに見ている事はできません」
その人は拳を強く握った。
「努力しようが無駄ですよ。所詮、何も変わりはしないのだから。それは無意味というものです」
「そうかもしれない。それでも、私は救い続ける」

コルプスと同じだ。容姿だけではない、むしろその心がだ。そして同じような結末を辿りそうなのだ。まるで変分原理のように。私はまた同じ過ちを繰り返したくは無い。コルプスの二の舞を踏まないように徹底的に自然を利用し、助けよう。
今度こそは、救ってみせる。もはや私は私自身に基底を置かない。私は、あの者に基底を置く。新たな契約を交わそう。アクアは左手を差し出した。
「え、じゃあ、力を貸してくれるんですか？」
「そうです。あなたが、頑張る様子を観測したいので」
アクアは、アルボを見た。アルボは笑顔だった。けれども、その

笑顔は、涙が一滴も流れてないのに、流れたような軌跡が刻まれていた。むしろ、涙を流しすぎて、涙の発散が０　∇・Ｌ（ａｃｒｉｍａ）＝０　になったようだった。

アルボはアクアの手を取ろうとした。その瞬間、上下に震動が起きた。Ｐ波である。揺れは少しして、収まった。資料の山が崩れたが、アクア達の方向に降っては来なかった。

Szene 2: Hochgebirg (高山)

アクアは、プリニウス艦隊（Pliniｕｓ Classis）の指揮を執っていた。

Ｐ波が到来した後、主要動が起きた。アクアは、震源を特定して、ここにも津波が到達する可能性があることを知った。アルボに、高所への避難誘導を頼み、自らは急いで、プリニウス艦隊を率いて、海へと向かったのだった。

プリニウス艦隊は、頑丈で無人走行可能な潜水艇、”大プリニウス”と”小プリニウス”というヘリコプターから構成されている。

大プリニウスは搭載された様々な観測機器によって、データを収集する事ができる。そして、そのデータを上空で待機している小プリニウスに水面から突き出したアンテナを使って送る事が可能だった。

大プリニウスの推進装置には、一般的なスクリューの他に、電磁推進装置も取り付けられていた。電磁推進とは、水中に超伝導体による強磁場と電流を流したことによるローレンツ力で、推力を得る方法だ。逆に船体を固定すれば、強力な水流を作り出すことが可能となる。

小プリニウスは、高解像度カメラで、様々な場所を観測できた。更にメーザーが搭載され、高出力のマイクロ波を放射する事が可能だ。メーザーを使えば、電子レンジと同じ原理で、水を蒸発させる事ができた。

その名をつけられた大プリニウス、本名、ガイウス・プリニウス・セクンドゥスは、『博物誌』の著者としても有名だ。現在では、古典となったものの、当時では、重要な資料だっただろう。彼は、ヴェスビオス火山噴火の際に、艦隊を率いて、ポンペイの救助に向か

い、そこで死んだのだった。そして、彼が残したポンペイの調査をまとめたのが甥の小プリニウスだ。

アクアの計画は、こういうものだった。

まず、小プリニウスが津波へと向かい、津波によって盛り上がった水に、マイクロ波を照射する。マイクロ波を吸収した水分子は熱振動が活発になり、一部は蒸発する。本来、隆起した部分は、重力によって元に戻り、周囲に新たな圧力を生じさせる。この繰り返しによって、波が伝播する。隆起部が蒸発して、消滅してしまえば、新たな圧力差が生じず、理論上は、津波の威力を削ぎ落とせる。

うまく行けば、この段階で、津波を消滅させる事ができる。消滅できなかった場合、大プリニウスの行動に移る。

大プリニウスが、水中に高磁場と高電流を流し、ローレンツ力によって、大きな水流を発生させる。そして、その水流を津波にぶつけて、弱めるというものだ。

津波を食い止められなかったとしても、弱める事は可能だろう。

二人のプリニウスは水と空気の二大流体中を進んでいく。

ついに、小プリニウスのカメラが今回の津波を捉えた。その振幅は、まだ海岸から遠いにもかかわらず高かった。アクアは、その津波をにらんだ。破壊的な波が、その性質を拡げようと至る所に忍び寄る。そして、ようやく復興し始めたばかりの街に襲いかかる。

「不可能に近い事は理性で分かっている。だが、私はここで戦いたい。あいつを、”自然”法則を征服したい」

ラプラスの魔が囁く。

「そんなことは、統計上ありふれた事だ。あなたも知っているはずだ。完全に情報を得てはいないが、自分自身でその確率を計算したのだから。だというのに、それに抗うなど愚かしい」

アクアは構わず、続ける。
「そして、それは可能な事だ。なぜなら、この水も運動の法則に従い、ポテンシャルを超えてはこないからだ」

Ｎａｔｕｒａ　ｎｏｎ　ｎｉｓｉ　ｐａｒｅｎｄｏｖｉｎｃｔｕｒ
自然に従い、そして征服せよ

「具体的には、ナビエ・ストークス方程式を解けばよいのだ。経験的に知られていた水を治める方法は、ニュートン力学によって再構成された」

ラプラスの魔が笑いながら語る。
「そのニュートン力学から、私は生まれた。そして、あなたはこれにコルプスを奪われた」

コルプスの最期を思い出し、心が壊れそうになりながらもアクアは話し続ける。
「けれども、ナビエ・ストークス方程式は、理論的で、応用では扱いづらかった。その理論と応用の狭間を埋めたのが、プラントルの境界層という概念だ。この概念を用いる事で、ナビエ・ストークス方程式は簡略化され扱いやすくなり、流体力学の応用を発達させた」

津波が、小プリニウスのメーザーの射程距離に入った。
「そして、私はこれらの”知識”という槍を持って、津波に戦いを挑む」
アクアはメーザーの照射スイッチを押した。小プリニウスはマイクロ波を照射し始めた。水がいくらか蒸発し、波が若干低くなったものの、まだ高かった。

大プリニウスの出番だった。水中に固定された大プリニウスから、アクアは磁場と電流を流し、フレミング左手の法則の向きに力が発生し、水が流れ始めた。そして、津波の方へ向かい、衝突した。
振幅はかなり小さくなったが、津波は消滅しなかった。

今のアクアに出来る事は、ここまでだった。後は、堤防が耐えられるかだ。もう、皆は避難しているだろう。そう思いながら、アクアは、小プリニウスのカメラを海岸に向けて、その映像を見ていた。海岸には誰もいない。一瞬、カメラを何かが横切った。カメラをその近くに戻し、ズームした。
そこにいたのは、アルボと子供だった。このままでは、津波に呑みこまれてしまう。助けなければ。アクアは潜水艇を全速力で、その海岸へと向かわせた。

Szene 3: Brett des Karneades（カルネアデスの板）

アクアは、アルボの元にたどり着き、急いで潜水艇から降りた。
「どうしてこんな所にいるんです？　早く逃げないと津波に呑まれます！」
アルボがこちらに向かいながら答えた。
「崖を降りれたけど、登れなかったんだ」
そこは、崖下だった。二人は滑って、低ポテンシャルに落ちこんだのだった。崖を登るのは、明らかに難しそうだった。落ちた衝撃で、子供は足を挫いていた。
津波が、もうすぐこの崖下に到達する。アクアとアルボは、避難場所を探したが、断崖と海の間には、小さな砂浜と潜水艇があるだけだった。

アクアは言った。
「アルボ、その子を背負って早く潜水艇に乗って下さい。海中で津波をやり過ごすしかありません」
アクアはアルボと子供を潜水艇に乗せた。そして、全速力で出来るだけ、海の遠く、深くへと向かった。津波が襲う前に、遠く深くに潜ればやり過ごせるだろう。アクアは、頑丈で、周りに障害物がない海底を見つけ、そこに潜水艇を固定した。そして、津波の到達予想時間を確かめると、アルボの方を向いた。
「今、潜水艇を海底に固定しました。後、数分で津波がここに到達するはずです。揺れが激しかったとしても、船が壊れる確率は低いです」
アルボは、少し安心したようだった。子供にも、同じ内容を噛み砕いて話し始めた。

ついに津波が船に到達した。津波によって船体が激しく揺れる。

今の所、潜水艇に問題はない。周りをすべて、水に囲まれた中にいるのは、アクアとアルボと子供。あの時と状況が似ていた。コルプスの代わりに、アルボと子供がいた。
　また、コルプスと同じ様にカルネアデスの船板状況に陥るのではと怖かった。だから、何度も何度も異常がないか確認していた。機器に何か異常があれば、報告するようにしていたが、報告するシステムそのものが故障している可能性が頭をよぎって落ち着かなかった。
　再び船板状況に陥ったら、私は迷わず、自らを犠牲にする方を選ぶ事に決めていた。コルプスと同じ選択だ。もし、船板が二枚ですらなくて、一枚しかなかったら、きっとアルボは、子供を助けるだろう。私も、同じ決断をするだろう。

　まだ、揺れは続いていた。ラプラスの魔が、囁き始めた。
「一つ、重大な可能性を考え忘れていませんか？」
その声には、どこか陰湿な笑いが含まれていた。
「何だ？　何度も様々な可能性を考慮した。思い当たらない。教えてくれ」
ラプラスの魔は、笑って言った。
「船板が三枚……ゼロ人死亡。　船板が二枚……一人死亡。　船板が一枚……二人死亡。　船板がゼロ枚……」
「黙れ！」
それは、絶対に考えたくない事だった。

　濁流が途切れて船の周囲に広がる海底が見えた。様々なものが津波に引きずりこまれていた。本当なら、記録として、記憶として、思い出として、あるいは日常として、存在するはずの物が水中に沈んでいた。数多の思いと共に。
”自然”よ、幾多の生命だけでは満ち足りず、生きてきた証すら、絆の証すら奪うというのか？

何かの石碑も転がっていた。そこには次の文章が刻まれていた。

Here lies one whose name was writ on water

その名が水に書かれし者ここに眠る

キーツの墓碑銘だった。”水に書かれる”という意味は、”記録に残らない”という事だ。決して、水に書かせはしない。記録に残してみせる。

なぜか、再発掘されたポンペイのことを思い出した。ほとんど一瞬で、火砕流に飲み込まれた都市、ポンペイはタイムカプセルと化して、時の歩みを止めていた。その中でも、固まった火砕流の空洞に石膏を流し込んで作られた像を思い出す。彼らは、火砕流に飲み込まれた刹那で縛られ、永遠に苦しんでいた。

たとえ、記録に残ったとしても、ポンペイの様になるのは嫌だった。

ついに揺れが収まった。船体に損傷はない。津波が通り過ぎたのだった。津波をやり過ごして、三人は、再び陸地に戻った。

Szene 4: Sorge （憂い）

三人が、高台にあるアクアの家に無事たどり着いた頃には、日が沈みかけていた。三人で家の展望室に上がり、ふもとの町を眺めた。この高台は、津波の発生源に近いため、すでに第一波が到来していた。三人は、第一波を水中でやり過ごし、第二波との合間をぬって、ここに来たのだった。

だが、ふもとの町は、発生源から遠いため、まだ第一波が到着していなかった。あと少しで津波が襲うはずだ。

大半は、高台に向かいつつあった。けれども中には、暗闇の中で道が分からなくなって途方にくれたり、間違って知らずに低所に向かっている者もいた。

彼らが暗い中でも、何か目印と出来るものはないか？　数多の方法を考え、その大部分を現実というふるいで落とす。もはや万策尽き果てたとき、いつか聞いた防災の話を思い出した。今と同じ様な状況で、何かをして、危険を伝えた話だ。何をしていた？

思い出した。稲を燃やしたのだ。『稲むらの火』という事実を基にした話だ。だが、ここにはもちろん稲はない。何か燃えるものはないかと、周囲を見渡す。

ふと、『ロウソクの科学』が目に入った。ロウソクを燃やすというのは？　だが、この家にロウソクは小さな物が数本しか無かった。ほとんどの照明は、蛍光灯かＬＥＤだったからだ。そして、家にある小さな懐中電灯では、目印にするには暗すぎた。諦めきれずに、その表紙を眺める。表紙は少し焦げていた。コルプスと実験をしたときに、引火したからだ。

そうか、紙を燃やせば良いのか！　稲も紙も、その主成分はセルロースだ。そして、紙ならこの家に沢山ある。だが、紙類を外に出している時間はないだろう。どうすればいい？

だったら、この家ごと燃やせばいい。本や紙の資料が沢山あるから容易に燃えるだろう。その炎は、遠くまで暗闇を照らし出すだろう。

高価な機器があるが、特別製でもないから、また作ればよい。数多ある書籍は、殆どが複写だからまた写せばよい。

「アルボ。闇の中をさまよう彼らの目印として、今から、この家を燃やそうと思います」

悲しそうに浜辺を眺めていたアルボは、その言葉に驚いて、アクアを見つめた。

「本当にやるのか？　ここには色々と大切な物があるんじゃ？」

「他に方法がありますか？」

アルボは、他の方法を考えながら辺りを見回していたが、少ししてうなだれた。

「私には、思いつかない」

「じゃあ、実行しましょう」

その言葉はとても冷たかった。

アクアは、燃料用エタノールを家の内部にばらまいた。そして、コピーの存在しない貴重な資料を抱えて、住居を後にした。アルボにも少し資料を持たせたが、彼が出てくるのは何故か、少し遅かった。もう一度、残したものを取りに行きたかったが、それは時間的に許されなかった。

アクアは住居に火をつけた。家は炎に包まれた。それとは逆に日は沈んだ。

しばらくして、この炎を目印に人々が続々と集まってきた。アルボが助けた子供も無事、家族と再会していた。

ついに、町が津波に飲み込まれた。皆、そちらを見つめていたが、

アクアはふと家を見た。燃えていた。望遠鏡、観測機器、本、皆燃えていた。だが、それよりも、コルプスとの記録が燃えている事が辛かった。記録が、大切な記録が灰になっていく。

記録を取りに戻らなければ。

無意識に、フラフラと炎の中心へと近づく。熱気が、分子運動が伝わってくる。

アルボは、アクアが炎に向かっているのに気づいた。

「アクア。何してるんだ！」

その空気の振動が、アクアの注意を現実に引き戻した。そして、アルボの方に振り返ろうとした。そのとき、小さな爆発が起こった。三角プリズムが破裂したのだった。無数の欠片が音速に近い速さで放射状に飛び散り、アクアの左半身に降り注いだ。その一欠片が左目へと向かい、アクアの光を奪った。

アクアは、”憂い”の魔女”Ｓｏｒｇｅ（ゾルゲ）”に光を奪われた。

暗闇で意識が朦朧とする中、”憂い”が呼びかける。

「もう、諦めたらどうですか？　あなたたちが、高い堤防を築いても、更に高い波が襲うだけだ。私は、何度もそれを見てきました」

アクアは反論する。

「堤防のおかげで死ぬはずだった生命を救う事ができた」

”憂い”が嘲笑する。

「死んだ人数と助かった人数を比較してみなさい。死んだ人数に比べれば、そんなのは微々たる物じゃないですか」

”憂い”は、様々な残酷な事実を語り続けた。アクアは、反論し続けたが、段々と気力を搾り取られていった。

もう、ほとんど抵抗力をなくしたアクアは、最後の気力を振り絞って叫んだ。

「だが、憂いよ。ひそかに忍び寄るお前の力に私は決して屈しない」

Szene 5: Das neue Vertrag （新たなる契約）

ふと気がついて、目を開ける。だが、見えたのは暗闇だった。何かを求めて、手を伸ばす。けれども、手は空を切るばかりだ。
その手が何かに握られた。それは空気よりも暖かかった。アルボの声が聞こえた。
「やっと、気づいた。大丈夫？」
その声は、いつもと少し、振動数が違っていた。
「一体、何が起こったんですか？　私には闇しか見えなくて」
「ああ、そうだった。ちょっと待って。今、包帯を取るから」
アルボは、アクアの包帯を取った。アクアの目に再び光が入る。最初に目に入ったのは、アルボだった。けれども、何故か前より二次元的に世界が見えた。
「どうやら私は、負傷して、気絶していたようですね」
「医師の診察では、命に別状はないらしい。多分、今は左手を動かしづらいだろうけど、時間が経てば治るって。だけど…」
アルボはそこで言葉を詰まらせた。アクアは、自分の手足を動かしてみた。アルボの言うとおり左手以外は、特に問題は無かった。だが、違和感は左手だけではなかった。何気なく、視界に入った鏡に自分の姿が映っていた。左手には、包帯が巻かれていた。だが、左目にもまだ包帯がしてあった。左目を触る。窪んでいた。気絶する前に見た、炎に包まれた家が脳裏によぎる。最後に見えたのは、視界をおおうガラス片。
「もう、左目は見えないんですね？」
アルボは、無言でうなずいた。ラプラスの魔は、”知識”の代償として左目を奪って、消え去っていた。知識の為ならば、全てを捧げても構わないと思っていた。だから、たかが、片目ぐらい大した事はなかった。それでも、実際に失ってみると、思っていたよりは辛かった。

アルボは、懐から何かを取り出して、アクアに差し出した。それは、アクアとコルプスが写った白黒写真だった。
「すまない。急いでいて、これしか持ってこれなかったんだ。多分、大切なものだと思ったから」
アルボはアクアの家を燃やす際に、大切だと思われる記録を探していたのだった。この白黒写真は、コルプスと二人で作ったピンホールカメラで写したものだ。背景に写る星々は、線上になっていた。日周運動が観測できるほど長い間、じっとしているのは大変だったことを思い出す。
アクアは、差し出されたアルボの手を、写真ごと握った。
「これで、ようやく契約成立ですね」
アルボは一瞬、何の事か分からなかったが、少ししてアクアと初めて会った時のことを思い出した。
「そうだね。契約前から色々と助けてもらったけど」
そしてアクアの右目を見つめて握り返した。新たな契約がようやく成立した。

「ところで、これからどうしましょうか？」
アクアが、そう尋ねたとき、病室のドアが開いて、小さな訪問者が現れた。あの時の子供だった。歩行の様子から判断すると、足の怪我は治ったのだろう。アルボが子供に聞いた。
「キュリオス。どうしたの？」
キュリオスは、アルボにお辞儀をすると、アルボの方ではなく、アクアの方に向かった。そして、何かをアクアに差し出した。家と共に燃やしたはずの『ロウソクの科学』だった。
「ごめんなさい。勝手に持ってきました。何か燃やしたくなかったんです。返します」
『ロウソクの科学』に書かれた通り、この子が、ロウソクの様に、

いやロウソクよりも、太陽よりも輝いて欲しいと願った。
「あなたに、あげますよ」
キュリオスは、うれしそうにページをめくって眺め始めた。そして、表紙の焦げた部分に気がついて尋ねた。
「なんで、ここは焦げてるの？」
「それは、私とコルプスで実験をしたときに火がついたからです」
「コルプスってだれ？」
アクアは持っていた写真のコルプスを指差した。
「私の友人で、先生のような人です」
「じゃあ、もっと頭いいの？」
「多分。私は、未だにチェスでコルプスに負け越しているくらいですから」
そして、永遠に勝ち越す事はできなかった。
「あの、その人に会える？」
「私がチェスが上手くなったので、自分が負けるのを恐れて遠くへ行ってしまいました」
キュリオスは、その返答を理解できたような、できないような感じだった。その真の意味を理解できたのは、アルボだけだった。

少しして、キュリオスは改まった様子で言った。
「お願いがあります。”科学”を教えてください」
その眼は、純粋で真剣だった。
「キュリオス。まず、”自然”を従わせるには、”自然”を知らなくてはなりません。例え、それが残酷な真実であったとしても」
「頑張って勉強します」
「では、まず最初の質問です。重い鉄球と、軽い木でできた球。どちらも、大きさや形は同じです。同時に落とした場合、どちらが先に地面に落ちるでしょう？」
「うーん。多分、重いほうが先に落ちる」
「では、実際に実験してみましょう」

アクアは、第一法則、慣性を教えようとしていた。

キュリオスが実験のために出て行ってから、アルボが言った。
「どうやら、当分の間やることは決まりましたね。あの子にどこまで教えるつもりですか？」
アクアは答えた。
「当面の目標は、ニュートンの運動方程式を使いこなせるようにすることです。更に流体力学の基礎となるナビエ・ストークス方程式も教えようと思います」
アルボは、その返答を聞くと、キュリオスの後を追った。

アクアはコルプスと自分が写った写真を握りながら、第四次元に向かって叫んだ。
「私が選ぶ道は、ポンペイの如く、永遠なる屍の記録でもなく、キーツの墓碑銘の様に、すべてを水に流す忘却でもない。記憶を受け継ぎ、未来を描いてみせる。時よ、刻め。意志の力は屈しない」

Szene 5: Das neue Vertrag（新たなる契約）（後

注意： 作中で用いた理論等は、著者が専門家ではなく素人である
ため、間違っている可能性があります。

全ての”自然”災害に苦しんでいる存在の幸福を切に願います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8627t/

Faust Facta　（ファウストの現実）　ラプラスの魔との契約者

2011年6月27日10時00分発行